

(様式1)

「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究(小・中学校)」
平成27年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名 (推進地域)	和歌山県	番号	30
-----------------	------	----	----

市町村名 (推進地区名)	協力校名	児童生徒数
新宮市	王子ヶ浜小学校	384名

○ 実践研究の内容

1. 推進地域における取組

和歌山県教育委員会では、平成27年度と平成28年度の2ヵ年間で学力向上に向けた実効性のある取組を進めるため「学力向上対策中期計画」を策定しており、その中で示した6つの視点に基づき取組を推進している。本年度、本事業では「学力向上対策中期計画」を踏まえて、以下の5点を中心に取り組んだ。

(1) 学力向上推進プランに基づく検証改善サイクルの確立

県内全ての学校が「学力向上推進プラン」を作成し、年間2回の検証改善サイクルに基づき、学力向上に取り組んだ。県教育委員会では、9月と3月に提出されたプランを点検し、市町村教育委員会訪問や学校指導訪問等を通じて、各学校の取組に指導助言を行った。

(2) きのくに学力向上総合支援(学力形成に係る研修・県学習到達度調査)

学力形成に係る研修では、約600名の教員(推進地区の教員は約30名)を対象に、「今求められる国語科の授業づくり」等について講義を行った。また、県学習到達度調査を12月8日に実施し、当該学年における児童生徒の学力の定着状況を把握するとともに、各学校において分析結果等を授業や補充学習に活用するように指導した。

(3) きのくに学力定着フォローアップ

県内72校に優れた授業実践力を持つ退職教員51名を年間10回派遣し、各学校の学力向上対策を支援した。推進地区では、小学校2校と中学校1校に退職教員3名を派遣し、授業への直接指導や師範授業等により、授業改善や若手教員の指導力向上を図った。

(4) 学力向上コアティーチャー養成・活用事業

教科指導に卓越した力を持つ「次代の教育の匠」の養成と、身に付けた学力向上に効果的な指導方法を活用した授業実践の普及により、児童生徒の学力向上を図った。平成27年度は、小学校教員20名、中学校教員10名を秋田県大仙市に5日間派遣し、実地研修で学んだ内容について、自校で実践するとともに、県や地域の研修会等で研修成果の普及を図った。

(5) 推進地区及び協力校への指導の充実

県教育委員会義務教育課及び東牟婁教育支援事務所指導主事等が、推進地区及び協力校を

訪問し、学力向上を図る授業改善の指導助言、研究の進捗状況の確認及び改善点の指導等を行った。また、和歌山県学力向上推進検討会を3回開催し、学識経験者、学校教育関係者、社会教育関係者、PTA関係者から本事業についての意見を聴取し、取組の推進に活かした。

2. 推進地区における取組

(1) 思考力・判断力・表現力と学習意欲を高める授業改善について

新宮市は、授業改善を図るために校内研修の充実を図っている。協力校の授業研究会や校内研修会では、言語活動を中心とした教材研究の充実や、児童が主体的に考え、互いに交流する授業の構築について指導助言を行った。

また、協力校で行われた研修会や、研究発表会（11月開催）、水戸部修治教科調査官訪問（1月実施）では、市内各校に参加を周知し、協力校における研究を他校に普及した。

(2) 基礎的・基本的な知識・技能の定着について

校長会や市教育委員会主催「学力向上推進委員会」（指導主事と推進地区内の小中学校研究主任により構成）を通じて、「読書タイム」や「ドリルタイム」等の時間を活用し、基礎的・基本的な知識・技能の定着を目指した取組を各校で推進するように指導した。

学力向上推進委員会では、各校で行った全国学力・学習状況調査の結果分析をもとに、課題の把握と解決に向けた研修を行った。また、「和歌山の授業づくり基礎・基本3か条」を位置付けた授業づくりについて徹底を図った。

(3) 補充学習と家庭学習の充実について

当市では、補充学習と「家庭学習の手引き」を活用した家庭学習の充実を図っている。

協力校では、全校児童を対象とした毎日10分間の「ドリルタイム」と、火曜日6限目の「学びの時間」を実施し、全教員が活用する教材や指導方法を共通理解して指導することで、学習内容の定着等に取り組んだ。「家庭学習の手引き」については学年の系統性等を踏まえて改訂し、各家庭での活用状況についてアンケートを実施した。アンケート結果の概要については、学級通信等を通じて各家庭に伝え、家庭学習の協力を働きかけた。

(4) 自尊感情を育み、互いに認め合う集団づくりについて

当市では、学級集団の実態把握のためにhyper-QU（よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート）を実施する学校が増加し、結果を具体的に活用するための研修も行われている。校内研修には、県教育委員会担当指導主事を講師として招いている。

協力校では、児童の学習意欲を高めるためには安心して学べ、自分の良さを認めてもらえる環境が不可欠と考えている。全学年がhyper-QUを実施し、結果を学級経営等に効果的に活用できるよう、外部講師を招いた校内研修を行った。

3. 協力校における取組

(1) 国語科の授業実践を通じた実践的指導力の向上

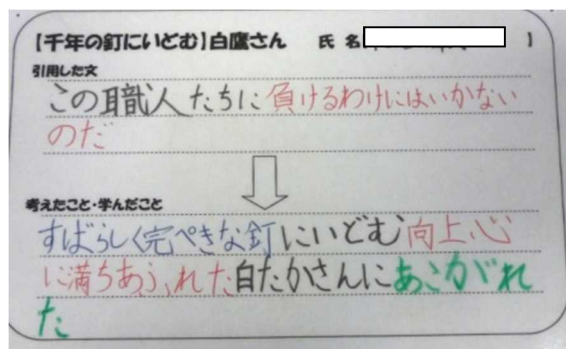
全教員が、「思いの共有」「ともに楽しむ」の2点を授業改善のキーワードにして、授業実践を行った。

「思いを共有する」とは、一人の児童の発言を学級全体で共有すること。また、「ともに楽しむ」とは、



児童にとって楽しい授業は、教師にとっても楽しい授業であるということ。この2点を押さえた授業を続けることで、児童は自らの思いをつくり、語るができるようになると考え

る。
「視写・音読から思いを語り、交流し、書いてまとめる授業」の活動の主たるものが、“視写から思いを語らせる”である。具体的には、本時で扱う場面を音読し、扱いたい言葉を視写し、さらに音読させ、交流することで、児童の発言を学級で共有した。この学習活動では、重要な言葉に着目させ、その言葉を獲得させるような展開を重視した。



さらに以下の3点についても、重点的に取り組んだ。

① 音読の重視

多様な音読（一斉読み、グループ読み、個人読み、指音読、指黙読等）を取り入れ、授業の中で繰り返して、思いを持って音読させる指導を行った。

② 視写の活用

教科書教材の全文視写・部分視写、児童が使えるようにしたい言葉の視写に取り組んだ。指導においては、ゆっくりと力をこめて書かせることで、児童が情景や登場人物の気持ち、文意に思いを馳せることに留意した。

③ 日記・作文指導

日記や作文を書くことは、書くという習慣を身に付けさせ、表現することへの抵抗感をなくし、自己の表現を他者に紹介されることに慣れさせる等、国語科の基礎を築くことを目的として取り組んだ。

(2) 思考力・判断力・表現力と学習意欲を高める授業実践

① 言語活動の充実

当該単元で身に付けさせたい力を明らかにし、その力を育成するために最適な言語活動を設定することを心がけた。「『モチモチの木』を読んで、心に残った文とその理由を書いた読書カードをつくる」、「『ごんぎつね』を読んで、登場人物の性格や気持ちの変化を中心に感想絵巻を作る」等、単元のゴールを明確にし、児童に見通しを持たせた授業づくりに取り組んだ。

また、課題にそって一人ひとり自らの力で文章を読み取っていく「ひとり学び」を行った。「『大造じいさんとガン』では、大造じいさんと残雪の心情を追う」、「『やまなし』では、五月と十二月の幻灯の映像句をつくる」等、「ひとり学び」をもとに、思いや考えを交流し、書いてまとめる授業を実践した。

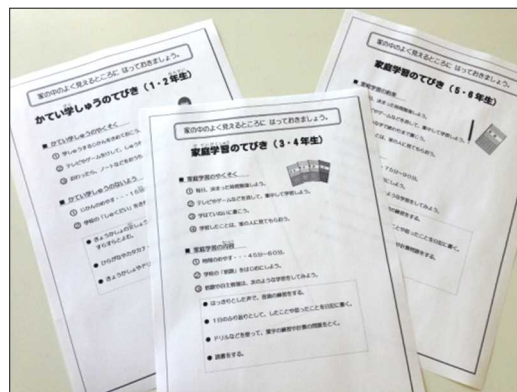
② 協力校独自テスト作成と実施

教師が独自に作成したテストの実施は、児童に身に付けさせた力を、別の教材を使って評価することをねらいとしている。協力校独自テストは、児童一人ひとりの実態を把握したり、学力の推移を継続的に確認することを通して、個々の課題をより明確にし、解決策を検討する手立てとして活用した。

(3) 家庭学習・補充学習の充実

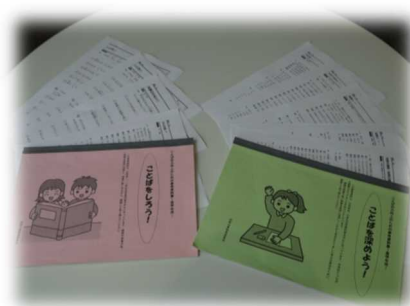
① 家庭学習のてびき

学校と家庭が連携して家庭学習の習慣を確立していくことを目指して、修正を加えた「家庭学習のてびき」を作成・配付し、家庭訪問や学級懇談等の機会を通して周知を図った。今年度は、新たにその活用状況と家庭学習の実態を把握するため、アンケートを実施し、その結果を分析した。



② ドリルタイムの充実

基礎学力の定着を目的にした毎日10分間のドリルタイム(13:15~13:25)において、平成27年度は「ことばの力向上のための参考資料集」(和歌山県教育委員会)やデジタルドリル教材等から、語彙や文法、文作り等の課題に応じたプリントを活用し、研究課題である「ことばの力」の育成を目指した。



③ デジタルドリル教材の活用

デジタルドリル教材には、テーマ学習をしたり、各教材での要点を確認したりしながら個人のペースで学習できる機能がある。その機能を使い、ドリルタイムだけではなく放課後等で個に応じた指導を行った。また、学習の定着度を測るための単元テストでは、その結果に応じた復習問題が用意されており、学習内容の定着に活用した。さらに、発展的な学習に挑戦したり、前学年までの復習をすることで、児童の学習に対する興味や意欲を高めた。

④ 「学びの時間」の設定

毎週火曜日6限には、全児童を対象とした補充学習「学びの時間」を設定し、国語・算数を中心に、学級担任とともに管理職を含めた全教職員で組織的な指導を行った。

(4) 児童の人間関係づくりと学習意欲の向上

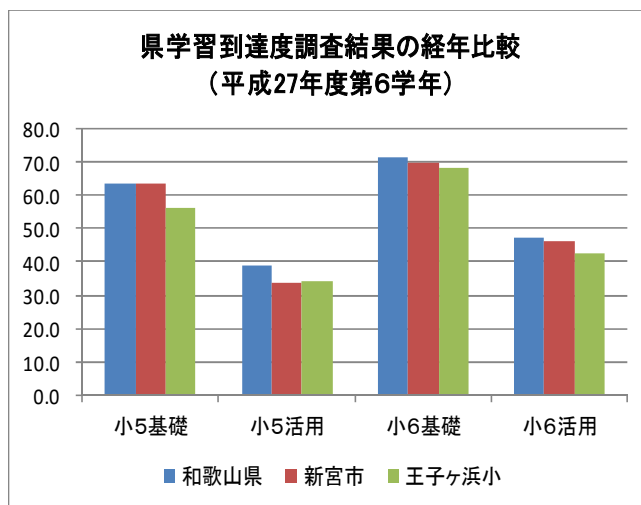
学習意欲の向上には、「一人ひとりが大切にされている」と児童が感じられる学級経営が不可欠である。児童の学校生活に対する意欲や学級満足度等を確認し、安心・安全な学級づくりを進めるため、hyper-QU(「よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート」)を活用した。診断結果については、学級担任が、管理職、養護教諭、学習支援推進教員とともに分析・検討を行い、特に、要支援群にいた児童に対しては、回答項目をさらに詳しく分析することで、学級において、当該児童が活躍できる場を設定する等、学校全体で取り組む体制を整えた。

○ 実践研究の成果

1. 協力校における取組の成果

(1) 学力調査による検証

第6学年児童の県学習到達度調査結果について、平成26年度と平成27年度で比較すると、県平均正答率との差が、国語「基礎」の平均正答率では4.4ポイント、「活用」では0.6ポイント縮まった。「理由の根拠になるところ」を選ばせて視写する取組や、付けたい力を見通し適切な言語活動を位置付けた授業実践、補充学習や家庭学習の充実が、基礎学力の定着につながったと考える。



また、全国学力・学習状況調査の国語に関する児童質問紙調査では、児童の肯定的な回答が増え、特に下記表の2つの質問事項については、大幅な改善傾向が明らかになった。協力校では、児童が自分の考えを表現したり、意欲的に学習に取り組んだりすることに課題を抱えているが、全学年で国語科を中心とした書く活動の指導を重点的に行った結果、課題が改善されていると考える。

【平成26年度と平成27年度の比較(%) : 「当てはまる」「全ての書く問題で最後まで書こうと努力した」と回答した割合】

質問事項		全国	王子ヶ浜小	差
国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気を付けて書いていますか。	平成26年度	29.0	22.2	-6.8
	平成27年度	32.1	36.1	4.0
今回の国語の問題について、解答を文章で書く問題がありました。どのように答えましたか。	平成26年度	76.1	59.7	-16.4
	平成27年度	77.7	80.6	2.9

(2) hyper - QU 調査による検証

【平成26年度と平成27年度の比較(%) : 「はい」と回答した割合】

質問番号	(4)	(5)	(6)
質問内容	学校で勉強していて、できなかったことができるようになるとうれしいですか。	授業中に先生の質問に答えたり自分の考えや意見を言うのは好きですか。	よい成績をとったり、もっと勉強ができるようになると努力していますか。
平成26年度	79.2	7.0	46.5
平成27年度	82.2	12.3	49.3
差	3.0	5.3	2.8

第6学年児童について、平成27年度調査結果と平成26年度(第5学年時)調査結果を比較すると、上記3つの質問において「はい」と回答した割合がいずれも向上している。hyper - QU の回答結果を分析し、全教職員で児童一人ひとりに応じた指導を共通理解して学級経営等を行った結果、児童の学習意欲が向上したと考える。

(3) 授業改善の状況

和歌山県学力向上推進検討会による授業評価において、平成26年度と平成27年度の評価結果を比較すると、項目9以外は改善傾向にあった。全教員が、児童の学習意欲の向上や「和歌山の授業づくり基礎・基本3か条」を共通理解して、授業改善に取り組んだ結果と考える。項目9の改善に向けては、協働的な学習活動における学習規律の徹底等を今後も重点的に取り組む必要がある。

学力向上推進検討会の検討員による授業評価

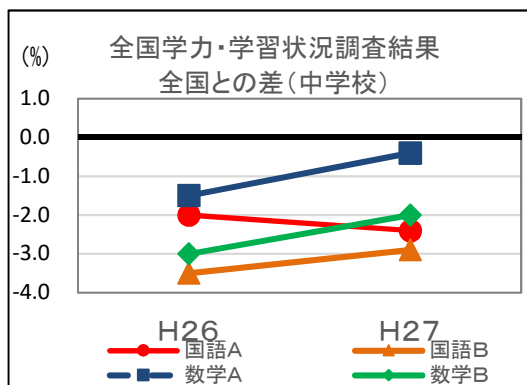
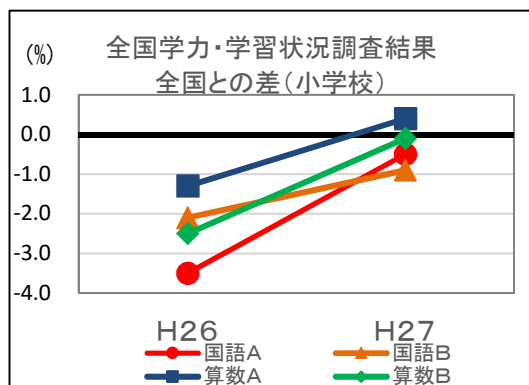
	評価項目	H27. 3. 5	H27. 10. 30
1	教員は児童の学力向上を目指して、授業の工夫をしている。	2. 3	3
2	教員は、具体的な授業のめあて（目標）を児童に示している。	2. 6	3. 2
3	教員は、児童全員が理解できる指示や発問を行っている。	2. 4	2. 8
4	教員は、1時間の授業の流れが分かる板書を行っている。	2. 3	2. 8
5	教員は、授業の中で、児童が自分の考えを書く活動を取り入れている。	2. 6	3. 2
6	教員は、授業の中で、児童が自分の思いや考えを話し合う活動を取り入れている。	2. 1	2. 4
7	教員は、学習に課題を抱える児童に適切な支援を行っている。	2. 1	2. 2
8	教員は、授業の終末に、学んだことを振り返る時間を確保している。	1. 9	2. 8
9	児童は、学習規律を守って授業に参加できている。	3	2. 8
10	児童は、意欲的に学習に取り組んでいる。	2. 9	3. 2

※各項目をA（よくできている）～D（できていない）で評価。表内の数値は、A～Dを4～1点として、検討員の評価結果を平均したもの。

2. 実践研究全体の成果

(1) 学力調査による検証

【全国学力・学習状況調査】



「授業がよくわかりますか」について、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した割合（単位：％）

児童質問紙	県	全国	差
H26国語	80.3	80.1	0.2
H27国語	82.8	82.0	0.8
H26算数	80.2	79.6	0.6
H27算数	82.7	81.0	1.7

生徒質問紙	県	全国	差
H26国語	67.8	72.0	-4.2
H27国語	70.2	74.3	-4.1
H26数学	71.9	71.5	0.4
H27数学	72.8	71.6	1.2

【和歌山県学習到達度調査】

無解答率 (%)		小学校			中学校	
		第4学年	第5学年	第6学年	第1学年	第2学年
H26	国語	6.8	9.9	6.9	3.8	5.4
	算数・数学	3.0	3.7	3.0	4.1	9.8
H27	国語	4.5	5.2	5.6	4.5	4.1
	算数・数学	3.1	2.7	2.5	5.4	6.9

平成27年度全国学力・学習状況調査結果の平均正答率について、小学校は、算数Aが全国平均を上回り、国語A・B、算数Bが全国平均程度、中学校は数学Aが全国平均程度、それ以外は全国平均を下回る結果となった。全国との差を平成26年度と比較すると、中学校国語A以外はその差が縮まっている。また、「授業がよく分かる」と肯定的に回答している児童生徒は、中学校国語以外は全国平均を上回っている。さらに、平成27年度県学習到達度調査の無解答率を平成26年度と比較すると、中学校第1学年以外は無解答率が下がっている。これらの結果から、各学校の学力向上推進プランに基づく取組の実行が、学力定着及び児童生徒の学習に対する意欲の向上に成果があったと考える。

(2) 学力向上施策の推進

当県では、全小中学校を対象に学力向上の取組に関するアンケート（7月、12月の2回）を実施している。本研究に関する項目については、以下の結果となっている。

○「和歌山の授業づくり基礎・基本3か条」を全教員が実践している学校の割合

※平成27年度から新設項目

小学校：38.5%(7月)→53.7%(12月) 中学校：15.3%(7月)→19.4%(12月)

○補充学習について、教職員で共通理解を図った取組として実施した割合

※平成27年度は、質問内容変更により、「全ての学級で取り組んでいる」割合を記載

小学校：54.8%(H25)→62.0%(H26)→86.1%(H27)

中学校：52.0%(H25)→57.9%(H26)→59.7%(H27)

○児童生徒に家庭学習の手引き等を配付し、家庭学習の習慣化を図っている割合

小学校：54.8%(H25)→62.0%(H26)→87.7%(H27)

中学校：52.0%(H25)→57.9%(H26)→83.1%(H27)

この結果から、学校全体で組織的に行う学力向上の取組が、県内に普及しつつあると考える。ただし、「和歌山の授業づくり基礎・基本3か条」については、平成26年度から全ての学校で取り組んでいるが、個々の教員については取組に差があることが明らかになった。研修会や学校指導訪問等を通じて、周知徹底を図る必要がある。

3. 取組の成果の普及

協力校の取組については、平成27年11月20日に研究発表会を開催し、児童の学習意欲を高める授業について全学級が公開するとともに、分科会及び全体会において補充学習や家庭学習、学力定着に効果的な教材の活用等について報告を行った。今後は、研究成果等について、市町村教育委員会指導主事会、東牟婁地方研修会、平成28年度和歌山教育実践研究大会（東

牟婁地方開催)等において、普及を図る予定である。

○ 今後の課題

(1) 学力定着に効果的な指導方法、補充学習・家庭学習の充実

学力に課題を抱える児童生徒の学力定着を図るために、「和歌山の授業づくり基礎・基本3か条」の内容について、学ぶ意欲を引き出す学習目標の提示の仕方、協働的な学習活動の実践、学習内容の定着状況を確認する振り返り活動の在り方等の研究を進める。また、補充学習の指導体制、家庭や地域と連携した家庭学習の習慣化について、継続して研究する。

(2) 検証改善サイクルの確立

各学校において、自校の課題に対応した学力向上推進プランを作成し、全国学力・学習状況調査や和歌山県学習到達度調査結果を活かして、取組を点検・改善しながら学力向上を図るサイクルを一層充実する。県教育委員会は、市町村教育委員会や学校に対して、課題改善に効果的な取組等について情報提供する等、適切な指導助言を行う。

(様式2)

「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究(小・中学校)」
平成27年度委託事業完了報告書
【推進地区】

都道府県名 (推進地域)	和歌山県	番号	30
-----------------	------	----	----

市町村名 (推進地区名)	新宮市
-----------------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

- (1) 思考力・判断力・表現力と学習意欲を高める授業改善
- (2) 基礎的・基本的な知識・技能の定着
- (3) 補充学習と家庭学習の充実
- (4) 自尊感情を育み、互いに認め合う集団づくり

2. 研究課題への取組状況

(1) 思考力・判断力・表現力と学習意欲を高める授業改善について

本市は授業改善を図るために校内研修の充実を推進している。本年度も地区内に10校ある小中学校の校内研究会等に年間30回指導主事を派遣し、授業や校内体制についての指導助言や各校での取組の紹介等を行った。

協力校である王子ヶ浜小学校の研究推進では、学校長の指示のもと研究体制を強化するために研究3部会(研究実践部、課題解決部、学力充実部)を立ち上げた。また平成26年度に引き続き、外部講師として京都教育大学附属学校部の戸田和樹氏を招聘し、国語科における授業改善と児童の学習意欲向上を柱とした取組を更に進めた。授業研究会や校内研修会には市教育委員会より指導主事を派遣し、言語活動を中心とした教材研究の充実や児童が主体的に考え、互いに交流する授業の構築について指導・助言を行った。

また、協力校で行われた「特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり」「hyper-QUを活用した学級づくり」「単元を貫く言語活動について」の研修会では、和歌山県教育委員会指導主事に講師を依頼したり、市内各校に参加を呼びかけたりする等、研修の充実に向け協力し、協力校における研究を他校へと普及した。

2学期には公開授業・分科会・研究報告を行う本研究の成果発表会を開催し、推進地区内にて協力校における学力向上に向けた研究内容の共有化を行った。

さらに、3学期に文部科学省より教科調査官が来校された際に「国語科の授業実践について」と題して講話をいただいた。その際も協力校だけではなく地区内各校に参加を呼びかけ、各校における取組の充実に努めた。

(2) 基礎的・基本的な知識・技能の定着について

校長会や市教育委員会主催「学力向上推進委員会」（指導主事と推進地区内の小中学校研究主任により構成）を通じて、「読書タイム」や「ドリルタイム」等の時間を活用し、基礎的・基本的な知識・技能の定着を目指した取組を各校で推進するように指導した。

また、学力向上推進委員会では各校で行った全国学力・学習状況調査の結果分析をもとに、課題の把握と解決に向けた研修会を開催した。児童生徒が見通しを持ち、主体的に学習する意欲の向上を目指して、和歌山県教育委員会作成「和歌山の授業づくり基礎・基本3か条（①授業のめあての提示、②自分の考えを書く活動を取り入れた授業展開の実施、③めあてに対する振り返り活動の設定）」を位置付けた授業づくりの徹底を図った。

協力校においては、毎日10分間の「ドリルタイム」を設けている。学習内容は「ことばの力向上のための参考資料集（和歌山県教育委員会）」やデジタルドリル教材等から、語彙や文法、文作り等、課題に応じたプリントを活用した。その結果、系統性を持った学習となり、基礎学力の定着につながった。

(3) 補充学習と家庭学習の充実について

当市では、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図るため、補充学習の充実に推進してきた。また、各校に「家庭学習の手引き」の作成と活用を指示し、家庭学習を促進させる取組を続けてきた。しかし、手引きが児童の実態に即していない状況も一部で見られたため、手引きの改訂及び活用について各校に指導をした。その結果、手引きを児童の実態に合わせて整理し、より活用しやすい形に改訂するという取組につながった。

協力校では、全校児童を対象とした補充学習の時間について、火曜日6限目を「学びの時間」として実施してきた。全教員が指導に関わることで、児童が学習内容の理解を深め、思考力を高める問題を用いた活用の向上を図り、学校全体の学力向上を目指した。また、家庭学習の充実に向け、「家庭学習の手引き」を学年の系統性や全体の統一性を図る観点から全教職員で改訂を行い、「改訂版」配付後には活用状況を把握するためのアンケートを実施した。加えて、アンケート結果の概要を学級通信等で保護者に伝え、学校と家庭が連携した手引きの活用は児童の学習習慣の定着や学習意欲の向上のためには不可欠であることを訴え、協力が得られるように働きかけた。

(4) 自尊感情を育み、互いに認め合う集団づくりについて

当市では学級集団の実態把握のためにhyper-QU（よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート）を実施する学校が増えている。結果を具体的に活用するための校内研修を行う学校も多い。その際、市教育委員会から和歌山県教育委員会に依頼し、専門の指導主事を講師として招いている。

協力校では、学力向上を図るためには、何よりも「学習意欲」を高めることが重要であるととらえている。「もっと分かるようになりたい」という気持ちを高めるには、安心できて居心地がよく、自分の良さを認めてもらえる環境が必要であると考えている。そこでhyper-QUを、全学年で実施し、その結果を効果的に活用できるよう、外部講師を招いた校内研修（「概

要と見方」「活用のしかた」)を行った。

この研修により、児童が個々に抱える問題を確認し、学級集団に対する教師の対応や学級経営を改善するための指針として、hyper-QUの結果を活用することができた。

3. 実践研究の成果の把握・検証

◇学力調査における検証

平成26年度・平成27年度和歌山県学習到達度調査(12月実施)と平成27年度全国学力・学習状況調査(4月実施)における同一学年集団による和歌山県と当市の正答率及び無解答率を表にすると以下のようなになる。

【平成26年度和歌山県学習到達度調査(小学校第5学年平均正答率%)】

	国語(基礎)	国語(活用)	算数(基礎)	算数(活用)
和歌山県	63.6	39.0	72.6	42.4
新宮市	63.4	33.6	70.8	41.0
差	-0.2	-5.4	-1.8	-1.4

【平成27年度全国学力・学習状況調査(小学校平均正答率%)】

	国語A	国語B	算数A	算数B
和歌山県	69.5	64.5	75.6	44.9
新宮市	68.4	64.6	73.9	40.8
差	-1.1	0.1	-1.7	-4.1

【平成27年度和歌山県学習到達度調査(小学校第6学年平均正答率%)】

	国語(基礎)	国語(活用)	算数(基礎)	算数(活用)
和歌山県	71.2	47.5	80.8	63.6
新宮市	69.6	46.0	79.5	65.3
差	-1.6	-1.5	-1.3	1.7

表からも分かるように、国語(活用)においては、平成26年度12月実施の和歌山県学習到達度調査では県平均正答率と-5.4ポイントの差があり課題が見られたが、平成27年度4月に実施した全国学力・学習状況調査では県平均正答率を0.1ポイント上回り、大きな改善が見られた。また、平成27年度和歌山県学習到達度調査では県平均正答率との差が-1.5ポイントとなり、若干差が広がったものの、ほぼ横ばいととらえている。平成26年度より本研究を受けた協力校の組織的・継続的な取組を市内各校に普及するとともに、児童が見通しを持って主体的に活動するために「和歌山の授業づくり基礎・基本3か条」を中心とした授業改善に取り組んだ成果と考える。

しかし、思考力・判断力・表現力を高める授業が全学校、全学年に浸透し、十分に授業改善がなされたとは言い難く、今後も「めあての提示」「振り返り学習活動」「考える(書く)活動」の充実をめざし、推進地区内各校の授業研究会や校内研修会に、市教育委員会より指

導主事を派遣し、指導及び支援を行っていく。

国語（基礎）においては、県平均正答率との差が-0.2ポイント、-1.1ポイント、-1.6ポイントとほぼ横ばいながら少しずつ差が開いてきており、基礎的・基本的な知識・技能が完全に定着したとは言い難い。読書タイム、ドリルタイム、補充学習、家庭学習等、基礎的・基本的な知識・技能の定着に向け、継続した取組を続けていくことが必要である。

【平成26・27年度全国学力・学習状況調査における無解答率】

	H26 無解答率 (%)		H27 無解答率 (%)	
	国語 A	国語 B	国語 A	国語 B
和歌山県	2.4	9.6	3.0	5.9
新宮市	4.5	14.5	4.5	6.7
差	2.1	4.9	1.5	0.8

【平成26・27年度和歌山県学習到達度調査における無解答率】

	H26 国語無解答率 (%)			H27 国語無解答率 (%)		
	第4学年	第5学年	第6学年	第4学年	第5学年	第6学年
和歌山県	6.8	9.9	6.9	4.5	5.2	5.6
新宮市	5.1	11.6	11.4	5.6	6.5	7.5
差	-1.7	1.7	4.5	1.1	1.3	1.9

学力調査における無解答率については、全国学力・学習状況調査の平成26年度調査で国語 B の県平均無解答率との差が 4.9 ポイントと課題が見られた。しかし、平成27年度では県平均無解答率より高いものの、その差は 0.8 ポイントと大きく改善された。同様に国語 A においても、県平均無解答率との差が平成26年度の 2.1 ポイントから平成27年度は 1.5 ポイントとなり改善傾向が見られる。和歌山県学習到達度調査においては、同一学年集団の平均無解答率を和歌山県の平均無解答率と比較すると、わずかであるが差が広がっている。

今後も基礎的・基本的な知識・技能を定着させる取組を継続するとともに、学習課題に対して自分の考えを表現する場を授業の中に設定し、学び合う指導の工夫を図る等、児童の学習意欲を向上させる取組を推進する必要がある。

4. 今後の課題

(1) 基礎的・基本的な知識・技能の定着と、思考力・判断力・表現力を高める授業改善

基礎的・基本的な知識・技能の定着に向けた取組の結果、学力調査の基礎問題で正答率が高くなる等、一定の成果が見られた。しかし、和歌山県の平均正答率と比較するとその差は少しずつ開いており、学力定着は十分ではない。今後は、言語活動を取り入れた授業づくりの充実等、これまで以上の取組を進める必要がある。

また、「和歌山の授業づくり基礎・基本3か条」を中心とした授業改善について周知し、指導した結果、これを取り入れた授業づくりが推進地区内で浸透してきている。しかし、児童生徒の思考力・判断力・表現力の高まりという点に関しては課題が残っている。児童生徒

が見通しを持ち、主体的に学習に取り組む授業を目指し、更なる徹底とその内容の充実を図る。

(2) 補充学習と家庭学習の充実

協力校では、児童生徒の確かな学力の定着を図るための効果的な補充学習を目指し、教職員が課題を共有し組織的な取組を行っている。また、家庭学習についてはアンケートの分析結果を用いた保護者への啓発を行い、学校と家庭が連携することで、学習習慣の定着等に少しずつ成果が表れているところである。しかし、推進地区内各校においては、組織的な取組に課題があり、推進地区全体で協力校の取組をモデルとした組織的・継続的な取組を推進する。

「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究(小・中学校)」
 平成27年度委託事業完了報告書
 【協力校】

都道府県名 (推進地域)	和歌山県	番号	30
-----------------	------	----	----

協力校名	和歌山県新宮市立王子ヶ浜小学校
------	-----------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 協力校における学力に関する課題

本校児童の課題として、自分に対してマイナス感情を持つ等、自己肯定感の低い児童が多いことがあげられる。学習については与えられたことは習得しようとするが、自分の考えを持つたり、人前で自分の意見や考えを発表したり、お互いに高め合ったりすることは苦手である。最後まで問題に取り組む粘り強さにも課題が見られ、複数の条件が提示された記述問題には特に無解答が多くなるという実態も、全国学力・学習状況調査の分析で明らかになった。

また、授業に限らず、さまざまな活動の場面で児童のことばの力の弱さを感じる事が多く、全ての教育活動において言語活動の充実を図れるよう、全教職員による共通理解のもと、取り組んでいるところである。

2. 協力校としての取組状況

本校では、児童に、各単元で付けたい力を明確にし、適切な言語活動を位置付け、多様な音読と視写(部分・ことば)から思いを語らせ、交流する授業を展開してきた。また視写・音読したことばや文をもとに思いや考え、気付きをつくり、それらを自分のことばで表現する活動を位置付けた授業の構築を目指した。以下に学習状況改善のための取組をあげる。

(1) 国語科の授業実践を通じた実践的指導力の向上

授業改善を進めるための共通理解として、教師にとっても、児童にとっても、楽しく・分かりやすい「平易平明な授業」を心がけてきた。「思いの共有」「ともに楽しむ」を、常に念頭におき授業を行った。

「思いを共有する」とは、一人の児童の発言を学級全体で共有すること。一人の発言をどう聞いたかを友だちに問い、その答えを発言者に返すという活動を大切にしてきた。

「ともに楽しむ」とは、児童にとって楽しい授業は、教師にとっても楽しい授業であるということ。その楽しさをともに味わうという姿勢を大切に、児童の発見をと



もに喜び、共有してきた。この2点を押さえた授業を続けることで、児童は自らの思いをつくり、語るができるようになると考えている。

「視写・音読から思いを語り、交流し、書いてまとめる授業」の活動の主たるものが、「視写から思いを語らせる」である。具体的には、本時で扱う場面を音読し、扱いたい言葉を視写し、さらに音読させ、交流することで、児童の発言を学級で共有していく。そうすることで、重要な言葉に着目させ、その言葉を獲得させるような展開をしてきた。

さらに以下の3点についても、重点的に取り組んだ。

① 音読の重視

多様な音読（一斉読み、グループ読み、個人読み、指音読、指黙読等）を行う。授業の中でも繰り返し音読を取り入れてきた。ただ読み方に変化をつければよいのではなく、どんな意図やねらいを持ってその読みをさせるのかが重要だと考えている。



② 視写の活用

教科書教材の全文視写・部分視写、児童が使えるようにしたい言葉の視写に取り組んできた。文章を「手で読む」、つまり「ていねいに一文字ずつ書く」ことにより、音読だけでは気づかなかったことや言葉に気づくという意味でも視写の重要性を感じることができた。

指導の際には、「ゆっくりと力をこめて書く」ことをさせた。書いているうちに、情景や登場人物の気持ち、文意に思いを馳せることができるようになってほしいと考えている。

③ 日記・作文指導

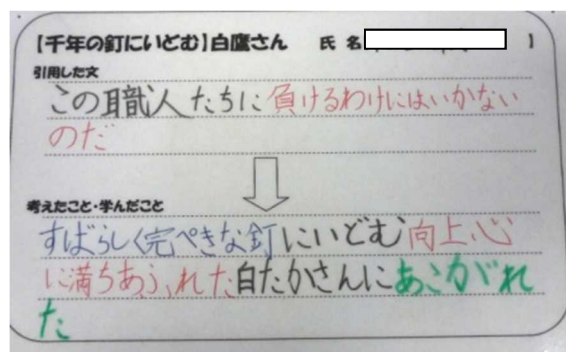
日記や作文を書くことは、書くという習慣を身に付けさせ、表現することへの抵抗感をなくし、自己の表現を他者に紹介されることに慣れさせる等、国語科の授業を底辺から支えるものである。

(2) 思考力・判断力・表現力と学習意欲を高める授業実践

① 言語活動の充実

単元を貫く言語活動の視点では、当該単元で身に付けさせたい力を明らかにし、その力を育成するために最適な言語活動を設定することを心がけた。さらに、教材研究段階で教師自身が実際にその言語活動を行うことで、児童がつまづきやすい箇所や指導のポイントがより一層明確になった。「『モチモチの木』を読んで、心に残った文とその理由を書いた読書カードをつくる」、「『ごんぎつね』を読んで、登場人物の性格や気持ちの変化を中心に感想絵巻を作る」等、単元のゴールを明確にすることで、自分たちの学びがどこに向かっているのかを常に意識しながら見通しの持てる学習となった。

また、課題にそって一人ひとり自らの力で文章を読み取っていく「ひとり学び」を行った。「『大造じいさんとガン』では、大造じいさんと残雪の心情を追う」、「『やまなし』

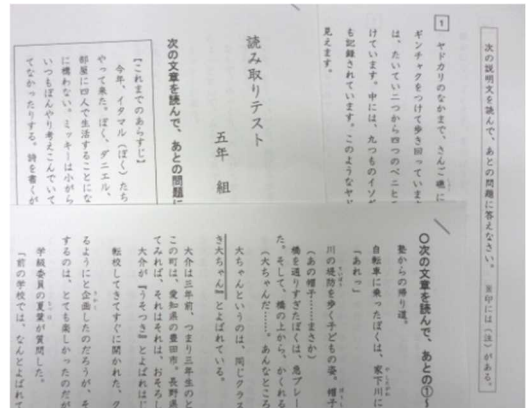


では、五月と十二月の幻灯の映像句をつくる」等、自分なりの学びをさせ、物語に対する思いをつくらせていった。その学びをもとに、思いや考えを交流し、書いてまとめる授業を構築した。

② 本校独自テスト作成と実施

教師が独自に作成したテストの実施は、児童に身に付けさせた力を、別の教材を使って評価することをねらいとしている。独自テストを作成することは、教材を見きわめたり、適切な設問を考えたりすることになり、教師自身の国語力を培うことにもつながる。

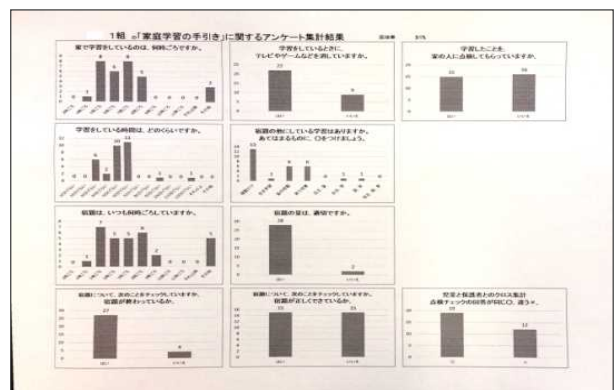
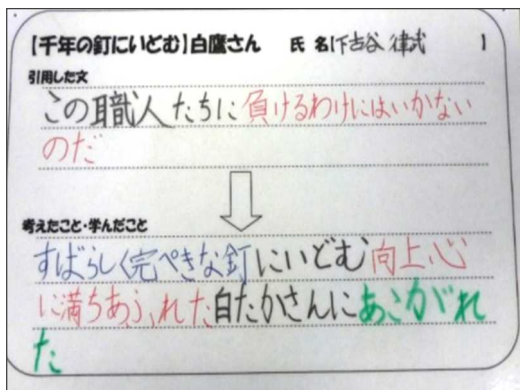
独自テストは、児童一人ひとりの実態を個別に把握したり、学力の推移を継続的に追跡したりすることを通して、一つ一つの課題をより明確にし、解決策を講じることに役立てた。



(3) 家庭学習・補充学習の充実

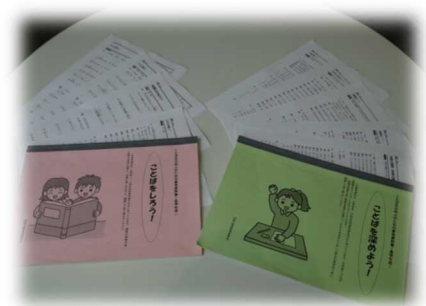
① 家庭学習のてびき

学校と家庭が連携して家庭学習の習慣を確立していくことを目指して、毎年修正を加えた「家庭学習のてびき」を作成・配付し、家庭訪問や学級懇談等の機会を通して周知を図っている。今年度は、新たにその活用状況と家庭学習の実態を把握するため、アンケートを実施し、その結果を分析した。



② ドリルタイムの充実

基礎学力の定着を目的に行ってきた毎日10分間のドリルタイム(13:15~13:25)において、平成27年度は「ことばの力向上のための参考資料集」(和歌山県教育委員会)やデジタルドリル教材等から、語彙や文法、文作り等の課題に応じたプリントを活用し、研究課題である「ことばの力」の育成を目指した。



③ デジタルドリル教材の活用

デジタルドリル教材では、テーマ学習をしたり、各教材での要点を確認したりしながら個人のペースで学習できる機能がある。その機能を使い、ドリルタイムだけではなく放課後等で個に応じた指導を行った。また、学習の定着度を測るための単元テストでは、その

結果に応じた復習問題も用意されているので、学習内容の定着に活用した。さらに、発展的な学習に挑戦したり、前学年までの復習をすることで、児童の興味や意欲を高めた。

授業者は児童個人の学習履歴を参考にして、つまずきの把握ができ、個に応じたプリント教材を補充学習等に活用した。また、フラッシュカード機能により、算数科における九九の確認等で、定着に効果的な指導を行った（各教室に設置した大型モニターを利用）。

④ 「学びの時間」の設定

毎週火曜日6限には、全児童を対象とした補充学習の時間として、「学びの時間」を設定し、国語・算数を中心に、学級担任とともに管理職を含めた全教職員で組織的に指導を行った。

(4) 児童の人間関係づくりと学習意欲の向上

学習意欲の向上には、「一人ひとりが大切にされている」と児童が感じられるクラスの雰囲気と、「どんな意見も受け入れてもらえる」という安心感が不可欠である。

そこで、hyper-QU（「よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート」）を実施し、現在、学級がどのような状態にあるのか、個々の児童の学校生活に対する意欲、学級満足度尺度での相対的位置等を確認することにした。

結果をより効果的に活用できるよう、外部講師を招き校内研修（「概要と見方」「活用の仕方」）を行った。これにより、児童が個々に抱える問題を確認し、学級集団に対する教師の対応や学級経営を改善するための指針を得ることができた。診断結果については、学級担任だけではなく、管理職、養護教諭、学習支援推進教員とともに分析・検討を行った。特に、要支援群にいた児童に対しては、回答項目をさらに詳しく分析することで、学級において、当該児童が活躍できる場を設定する等、その児童に応じた手立てを講じ、学校組織として多角的に見守る体制を整えた。

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 和歌山県学習到達度調査の結果から

【県学習到達度調査経年比較（平成27年度第6学年平均正答率%）】

平成27年度 第6学年	平成26年度（5年生時）		平成27年度（6年生時）	
	国語（基礎）	国語（活用）	国語（基礎）	国語（活用）
和歌山県	63.6	39.0	71.2	47.5
王子ヶ浜小学校	56.0	34.4	68.0	42.5
差	-7.6	-5.6	-3.2	-5.0

本校第6学年児童の県学習到達度調査結果について、平成26年度と平成27年度で経年比較すると、県平均正答率との差が、国語「基礎」の平均正答率では4.4ポイント、「活用」では0.6ポイント縮まった。情景や登場人物の気持ちを丁寧に読む力を身に付けるために、「理由の根拠になるところ」を選ばせ、視写する取組や、各単元で付けたい力を見通し、適切な言語活動を位置付けた授業を実践した結果、基礎学力の定着につながったと考える。

(2) 児童生徒質問紙の結果から

【平成26年度全国学力・学習状況調査 児童質問紙調査結果 (%)】

質問番号	48	56	57	59
質問内容(要約)	話し合う活動で自分の考えを深めたり広げたりしている	発表でうまく伝わるように話の組み立てを工夫している	国語の授業で、自分の考えの理由が分かるように書いている	国語の書く問題で最後まで解答を書こうと努力した
全国(公立)	22.7	19.0	29.0	76.1
王子ヶ浜小学校	18.1	9.7	22.2	59.7
差	-4.6	-9.3	-6.8	-16.4

【平成27年度全国学力・学習状況調査 児童質問紙調査結果 (%)】

質問番号	46	54	55	57
質問内容(要約)	話し合う活動で自分の考えを深めたり広げたりしている	発表でうまく伝わるように話の組み立てを工夫している	国語の授業で、自分の考えの理由が分かるように書いている	国語の書く問題で最後まで解答を書こうと努力した
全国(公立)	25.2	21.4	32.1	77.7
王子ヶ浜小学校	23.6	15.3	36.1	80.6
差	-1.6	-6.1	4.0	2.9

全国学力・学習状況調査における児童質問紙調査について平成26年度と平成27年度における全国平均と本校平均について比較したものが上の表である。

「国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気を付けて書いていますか。」という質問に「1. 当てはまる」と回答した児童は平成26年度は全国平均と比較して6.8ポイント下回ったのに対し、平成27年度は4.0ポイント上回り、大きく改善した。また、「今回の国語の問題について、解答を文章で書く問題がありましたが、どのように解答しましたか。」においても、「1. 全ての書く問題で最後まで書こうと努力した。」と回答した児童は平成26年度は全国平均と比較して16.4ポイント下回ったのに対し、平成27年度は2.9ポイント上回り、大きく改善した。

自分の考えを持ったり、意欲的に取り組んだりすることが本校児童の課題であったが、全学年で、心情描写・情景描写を読み取る際に多様な読みや視写(部分視写)を取り入れる等、「書く」活動を重視した指導を行った結果、これらの課題が改善されたと考える。

しかし、「国語の授業で意見等を発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫していますか。」の問いに、「1. 当てはまる」と回答した児童は15.3%と低く、全国平均を6.1ポイント下回った。また、「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか。」の問いに「1. そう思う」と回答した児童は23.6%であった。話し合う活動で自分の考えを広げたり、国語の発表でうまく伝わるように話を組み立てたりすることにおいて、平成26年度よりもその差は縮まり、改善されてきているが、課題は十分改善されていない。本文のことばを根拠にして「思い」や「考え」を読み取り、児童自身のことばで語らせる活動を今後もより一層充実させること

が必要である。

(3) hyper - QU 活用の結果から

【平成26年度と平成27年度 hyper - QU 調査の比較 (%)】

質問番号	(4)	(5)	(6)
質問内容	学校で勉強していて、できなかったことができるようになるとうれしいですか。	授業中に先生の質問に答えたり自分の考えや意見を言うのは好きですか。	よい成績をとったり、もっと勉強ができるようになろうと努力していますか。
平成26年度	79.2	7.0	46.5
平成27年度	82.2	12.3	49.3
差	3.0	5.3	2.8

平成27年度の6年生の調査結果をみると、5年生時に実施した調査では「学校で勉強していて、できなかったことができるようになるとうれしいですか。」において、79.2%の児童が「はい」と答えたが、6年生時に実施した調査では82.2%と向上した。また、「授業中に先生の質問に答えたり自分の考えや意見を言うのは好きですか。」において「はい」と答えた児童は7.0%から12.3%に向上した。

上記の3つの質問は学習意欲を問うものであるが、Hyper - QU 実施後、個々の回答結果を詳しく分析し、当該児童に合った適切な手立てにより、全教職員で対応した結果、学習意欲が向上したと考える。

4. 今後の課題

本研究を推進し授業改善の取組を積み重ねてきたことにより、少しずつであるが確実に児童の姿は変わってきている。話し合いが活性化し、自分と似ている考えに共感したり、違う感じ方に関心を持ったりする等、よりよく聞き、話す姿が見られるようになってきた。それは発言やノートの記述で見てとれる。しかし、自分の思いや考えを持つことはできても、それをみんなの前で、工夫しながら話すことに苦手意識を持っている児童はまだ多い。また、意見を交流する場面で、友達の思いや考えを聞いても、最初の自分の考えにとらわれてしまい、思いを広げたり、深めたりすることができずにいる児童もいる。児童の思いをつなげ、広げていくための声かけや示唆、音読を評価する際の言葉等、児童が意欲的に活動するための手立て等も含めて、引き続き、これまでの取組を継続する。

今後は、より一層の授業改善を目指すためにも、授業を録画し、教師のどのような言葉で児童の活動が活発になるのか、逆に、活動が停滞してしまったのは、教師のどのような言葉が原因だったのか等を研究し、主体的な学び、意欲的な学習ができるようにしていきたい。

2年間の研究を一層推進し、研究指定初年度（平成26年度）の1年生が6年生になったとき、どのような学力が身に付いているかを見きわめるという長期的な展望を持ち、学校全体で系統性を持った研究を深める。